

# 早生植林材・国産材利用シンポジウム

2024年11月16日 13時30分～

場所：宍粟防災センター4F 研修室

主催：(公社)日本木材加工技術協会関西支部 早生植林材研究会

共催：早生樹活用研究会 塩田早生樹植林活用研究会

後援：宍粟市 兵庫県木材業協同組合連合会

## プログラム

13：30—13：35 開会 司会 村田功二

13：35—13：40 開会挨拶 早生植林材研究会世話人 横尾國治

13：40—14：10 早生樹材・国産広葉樹材の動向 京都大学教授 村田功二

14：10—14：40 新しい早生植林材利用技術 京都大学 山田範彦

14：40—15：10 SDGsを活用した木材利用 (株)ユニウッドコーポレーション  
横尾國治

15：10—15：40 森林革命で里山の活性化 パナソニックエレクトリックワークス創研(株)  
中ノ森哲朗

15：40—16：10 休憩 (早生植林材の新製品展示見学)

16：10—16：30 質疑応答

早生植林材研究会は平成18年5月に発足しました。当初は熱帯林保護の観点から南洋材に代わる原料を検討するために活動を始めました。

一般的に早生樹は植樹後5年から15年で伐採をされる樹木を言いますが、その成長が速い分空气中の炭酸ガスを多く吸収します。一方、早生樹の成長の早さは木材として利用する際のいくつかの材質上の問題にもつながり、自然の恵みであった天然木と同様の利用が困難でした。このような問題点を克服して早生植林材を大量に利用するための技術と製品を開発し、その流通システムをつくることは、空气中の炭酸ガスを減少させて地球温暖化防止の一助として環境に貢献するうえで、木材関係者にとって極めて重要な課題と言えます。

炭酸ガスを大量に排出して生産する鉄やコンクリートに代わって木材を建築材料として活用する『都市の木質化』が始まろうとしています。最大の課題が火災から建物を守る『耐火構造建築』と『内装の不燃化』です。また日本の人工林は年間約8000万m<sup>3</sup>の成長がありますが、年間約3500万m<sup>3</sup>の伐採量です。一方、日本の木材消費量の約60%を海外から輸入しています。原因は日本の主たる植林木のスギが『軽い・弱い・曲がり易い、乾燥が難しい・材質のバラツキが大きい。』という材質で建築材料として適さないということです。

本日は同様の課題を持つ早生植林材での私たちの取り組み内容を紹介して、国産材での実用化に向けて参加者の皆様と協力をして需要拡大と里山地域の活性化に取り組むたいと考えています。

2025年に大阪市夢洲で開催される『大阪・関西万国博覧会』は『いのちかがやく未来社会のデザイン』のテーマに沿って、そのシンボルとして世界最大の木製構造物の『木製大屋根リング』の建築をしています。私たちの生業とする木材は、近未来の姿を提案する万国博覧会のシンボルとして選ばれています。川上＝林業と川下＝木材業がひとつの産業＝『森林産業』として手を結び、この追い風を帆に受けて前進したいと思います。

2024年11月16日

益社団法人日本木材加工技術協会 関西支部 早生植林材研究会